


# 図書館 205 教室

鈴木武次 

## はじめに

43年に亙る立教学院・立教新座高等学校での教壇活動を恙なく定年退職出来ましたことは、偏に、我が母校「立教高等学校」に限りない感謝の念を表したいと思います。

私は縁あって1964（昭和39）年4月より池袋から志木に移転した立教高等学校の社会科の日本史教諭として教育活動をするようになりました。以来40余年に亙り、寄宿寮の教員として、クラブ活動の指導者として、はたまた、『立教学院百二十五年史』、『立教高等学校50年誌』の編纂に編纂委員の方々と共に尽力できました事は、恩師の皆様、先輩の諸先生方、事務・校務・保健管理に携わる方々、同僚・後輩の先生方、卒業生・生徒諸君と、そのご父兄の皆様のおやかなご配慮とご協力の賜物と感じ、お礼の言葉も見あたりません。

私は定年前の最後の一年間、図書館205教室を是非使用したいと思いました。教務部に我が儘を言って205教室の使用申請をしましたのは次のような理由があったのです。

この205教室は1982（昭和57）年に図書館が完成し閲覧室の二階部分の会議室として存在していました。私はこの会議室を『立教学院百二十五年史』編纂のために必要な高等学校の史料を蒐集するための作業場として利用させてもらいました。しかし、2000（平成12）年に学校名が「立教高校等学校」から「立教新座中学校、高等学校」と改名され、立教新座中学校が新設されると同時に、この会議室が2つ取り壊され中学校の普通教室となり、205教室と呼ばれるように成ったのです。

この図書館棟205教室は北側に窓があり、いつも校庭が見渡せ、自然の移りゆく情景を眺めることが出来ました。特に15年間生活した寄宿寮の貴重な生活を忘れないため、寄宿寮の東寮を何時も眺めることが出来たのです。亦、図書館の閲覧室で常時私が席を占めていた場所の真上にあり、勉強をすることの大切さを教える場としては、この上ない条件を持った場所で、本館の教室からは離れておりましたが、定年前に日本史の授業を教えるには、最適の場所であったのです。

## 薫 風

四月、日本史を選択した二年生29名の生徒が図書館205教室に入ってきた。

「先生、この教室遠いし、歩いてくるのダルイよ。」

「バカ云うんじゃない。先生は今年が最後で、今年一年きり授業は出来ないんだ。」

「じゃあ、普通教室でいいじゃん。どうして此処じゃなければいけないの？」

「この教室で授業を聞いていれば、いまに解るよ。この教室は最高の場所なんだから。」

「先生、立教構内なら皆同じじゃん。普通教室なら移動しなくて済むんだからさ、...。」  
「まあ、よく聞け、私は立教高校の卒業生で、諸君の先輩なんだ。先輩の話は聞くもんだ。私は未だ立教高校が池袋にあった時代の最後の卒業生で、立教大学は文学部の史学科に入りそこで日本史を専門に勉強してきた。教員になって 40 数年この新座の立教で教えてきた。この教室は立教の教室の中で一番良い場所なんだから。この教室で諸君に日本史を教えられる最後の年なんだ。解ってくれるか？」

生徒の不満は立教の先輩の先生じゃしょうがない。文句を言ってもはじまらない、先生の顔を立てて、この教室で授業を聞いてやるかという気持ちに変わっていった。

「私は最初に話して置く、諸君は私の後輩、立教のジェントルマンなんだから、ジェントルマンらしくしなさい。ジェントルマンとは英国の紳士を指す言葉だが、立教の建学の精神は英国のキリスト教の中心であるアングリカンチャーチ（国教会）という教会に属して居ります。英国の有名なパブリック・スクール（私立学校）はこの国教会を尊重し、教育の基本原則にしています。即ち立教新座高校の教育は英国の有名な私立学校と教育の目的を一つにしているのです。英国の私立学校の教育目標は人間を育てることに重点が置かれ、英国国教会の精神と、学問と教養を養うことに価値を置いて居ります。即ち社会のリーダーになるための訓練がなされる学校なんです。どうか諸君、英国の有名私立学校の教育よろしくスポーツを行って強健な体力を養い、クラブに入って深い教養を身に付け、一所懸命勉強をしてください。早稲田や、慶應とは訳が違うんです。

更に大切なことは聖書を学び、キリスト教の愛の精神を身につけ、弱い者や、貧しい者を助け、諸君の隣人を大切に、分け隔て無く多くの友人を造って欲しい。立教ジェントルマンとして社会に飛び立ち、金や名誉や地位を大切に作る人間ではなく、有名にならなくとも、誠の人間として、人を信じ、愛の気持ちを持ったジェントルマンになって欲しい。私の教育方針はこの立教ジェントルマンになるように教えて参りますから、しっかり勉強に立ち向かって欲しいと思います。」

教室の窓からは八重桜の花が見え、新緑の青葉が光っていた。

五月に入ると心地よい薫風が教室を駆け抜ける。黒板に「薫風」と文字を書き、五月に吹く爽やかで強い南風の由来を説明。しかし、時にはこの薫風が海難事故を引き起こし、多くの悲劇を生んできた海難史を話している内に、立教学院の創立記念日を迎える。

「諸君ご存じのように、今年は 5 月 9 日が立教学院の創立記念日、授業は休みで創立記念日礼拝が行われる。そこで今日は少し立教の話をするからよく聞きなさい。

立教学院の創設者チャニング・ムーア・ウィリアムス (Channing Moore Williams) は 1829 年アメリカ合衆国大西洋岸のヴァージニア州のリッチモンドに生まれました。彼はウィリアムズバーグのウィリアム・アンド・メリー大学に入学、2 年して卒業。更にワシントン南方のヴァージニア聖公会神学校（英国国教会）に進学し、キリストの福音を海外に広めることに使命を感じ、同級生のジョン・リギンスと共に中国への派遣を申し出で、1855 年 26 歳の時にニューヨーク発シドニー経由で 7 ヶ月の船旅をして上海に到

着しました。私は数年前シドニーに出かけて調べたことがあります。シドニーに上陸する人は必ずサキュラキーから上陸するので、この港湾周辺を何度も何度も往復したことがあります。この場所はシドニーの英国提督官邸の眼下にあり、美しいオペラハウスの直ぐ近くにあり、シドニーに行ったら一度は訪問すべき所です。(註1)

話はそれてしまいましたが C.M.ウィリアムスが中国で伝導活動に尽力していた頃、1858(安政5)年に「日米修好通商条約」が締結されたのを機に、翌(安政6)年に長崎に上陸、崇福寺という寺院に住みます。当時の日本社会は幕末期で、国内情勢は騒然としており、尊王攘夷運動が高まりを見せ、欧米人の周辺は危険が増していました。ウィリアムスはひたすら祈りを捧げながら日本語の学習に励み、布教が可能となる日に備えて主祷文、使徒信経、十戒や祈祷書を翻訳し、日本人には英語を教えキリタン禁令撤去の来る日を待ったのです。この間明治政府は多くの諜者(スパイ)を放って宣教師の言動を調査しています。その内の一人伊沢道一の報告書に次のような記録があります。

「道ノ為ニ死ヌ人ガ多ケレハ道ガ早フ開ケマス 私共コノ日本ニ渡リテ居マシテハ本国ニ還テ死ヌルトハ思マセヌ タトヒ殺サレマセウトモ更ニ恐レヌ(中略)道ノ為ニ死ヌルトハ基督ヘノ忠也」(註2)

ということが書かれてありますように、死を覚悟してまで福音を伝えることに全力を尽くしたのが校祖ウィリアムスだったのです。

1873(明治6)年明治政府は終にキリタン禁止の高札を撤去すると44歳になった主教は活動の中心を首都に置くことを決意し1873年11月に大阪から東京に移転し、1874(明治7)年2月4日に東京築地居留地に立教学院の基礎を築いたのです。以来今年で133年を数え、多くの優れた人材をこの世に輩出、天下に立教の名を高からしめてきたのです。諸君もこの伝統ある立教で勉強する事を大切にして、校祖ウィリアムスの精神を生かし、立派な立教ジェントルマンに成長して欲しいと思います。

尚、立教学院創立記念日は1974(明治7)年2月4日に築地居留地の一角に誕生したのですから、初期の頃は2月4日を創立記念日にしていましたが、その時期は丁度ど入学試験にぶつかり、余り相応しくないと云うことで、男子の学校だから端午の節句の5月5日を創立記念日に当てました。しかし戦後国民の祝日制定によって5月5日が子供の日で国民の祝日になったため、5日を中心にした良き日を創立記念に充てることにして居るのです。学院の理事会が決定しますから、年によって移動する変則的な記念日なのです。」

5月22日から26日にかけて『修学旅行』が実施された。図書館205教室のメンバーは全員沖縄コースに参加することになり、私も付き添い教員として加えて戴きました。そこで生徒諸君と共に、最後の校外研修に最善の努力を果たそうと思ったのです。

修学旅行は無事に帰って当たり前、参加する生徒に何らかの不祥事が生ずれば、引率する教員はご父兄に申し訳が立たず、引率する責務から逃れることは出来ません。故に生徒諸君と寝起きを共し、教室以外での彼等との接触を大切にしようと思いました。また生徒

諸君の健康状態に細心の注意を払い、無事帰京する事だけを願いました。

この沖縄コースは戦争体験者から直接戦争の話を聴き、戦争の悲劇を再び繰り返すことが無いように、平和学習の大切さを最大の指導目標にしておりました。学校の教室では得られない現地で直接戦争体験者の話を聞く体験は、生徒諸君に強力なインパクトを与えますが、そこで学ぶ学習は教室での学習効果を遙かに凌駕する何ものでもないのです。

## 上原当美子氏の講演

元沖縄師範学校女子部3年、ひめゆり学徒隊として動員された上原当美子(78)氏は定刻を少し遅れて到着、高齢にもかかわらず<sup>かくしゃく</sup>嬰 鑠たる姿で壇上に上がり、生徒諸君の前で生きていることの大切さと、再び戦争を繰り返してはならないことを切々と訴えました。

上原当美子氏の講演を聴いている大部分の生徒は真剣にノートを取り聴き入っていました。私も講演を筆記しましたが全部を正確に記録できたかどうか不安ですが、話の大筋は次のようでありました。

「私の学校は沖縄師範学校で<sup>あんり</sup>安里駅のすぐ近くにありました。私の学生生活は戦時中で「ホシガリマセンカツマデハ」と言われ物には恵まれませんでした。1940年頃から軍隊の姿が次第に増えてきましたが、まさか沖縄が戦争の真っ直中になるとは一度も思いませんでした。

戦争は必ず勝つモノと信じていました。沖縄戦は1945年3月23日始まりました。戦争開始と同時に南風原にある陸軍病院へ看護婦見習い学徒隊として動員されました。

女子生徒222名と教員18名の合計240名が同時に動員されたのです。戦場ではなく病院に行くのですから命は保証されていると思っていました。

戦争が始まったのは3月23日で6月23日の沖縄戦争終戦日までの3ヶ月間凄まじい戦いが演じられました。沖縄の民間人約40万人と軍属11万合計51万人と米英軍54万人との戦いで、僅か3ヶ月の間に日本人は約23万人が亡くなりました。

生き残った私達は、ひめゆり同窓会を組織しています。学校は無くなり、同窓会の人数も年々少なくなって参りましたので、私たちが体験した戦争の恐ろしさを後生に示し、再びあのような悲惨な出来事を繰り返さないために、今から17年前に、国や県から一銭の援助もなく資料館を造ることにしたのです。

戦争が始まると負傷兵が運び込まれてきました。その数は日増しに増加し、大変な看護生活でした。特に5月25日以降首里を離れた軍司令部は南風原の病院をたたみ南部に移動しました。5月25日から6月18日の解散命令が発令されるまではまるで生き地獄でした。負傷者の内で治る人は一人もいませんでした。物資はなく薬品も麻酔薬もありません、でも手術は行われますが包帯の中は蛆だらけでした。戦争になれてしまうと、かわいそうだとか、気の毒だとか言う気持ちはなくなります。ピンポン球ぐらいのおにぎり一個で一日の食事はおしまい。暗い壕の中で寝るのは2～3時間。ほとんど立ったまま、横になることも出来ず、血と膿の臭いの中で、排泄物の処理を行いました。

そんな生活でしたが、私たちは日本軍は負けるとは思いませんでした。4月29日の天皇誕生日や5月27日の海軍記念日は、必ず日本兵が助けに来ると信じていました。

6月に入ると敵の攻撃は激しさを加え、南部地区は激戦地になったのです。森や畑の緑が無くなり食べるものもなくなりました。

14日に他の壕に伝令兵となって砲弾の雨の中走りました。途中でアキちゃんが亡くなりました。戦火の止んだ少しの間、土を掘り埋葬しましたがそれが最後の葬儀でした。後は葬儀は出来ず、多くの友人が命を落としましたが、みなそのままでした。

17日小春倉ミッチちゃんに面会できました。彼女は美人で有名でしたが顔色が悪く、頭を見るとシラミがいっぱいでした。日に日に衰弱していきました。病気だったのですがほとんど食べるものもなく痩せていきました。最後にさとうきびのかけらを食べました。(以上文責鈴木武次。これ以降は資料集の中の文章を利用します。)

砂糖キビを食べ終わる頃に砲撃は始まったのです。牧志鶴子さんが私からキビ殻を取って、「私が捨てに行くよ」と自分の上着の裾に移したんですよ。それで私は壕に入りました。わずかばかり歩いた曲がり角でピンを落としてしまって、探そうとしゃがんだそのとたん、至近弾が炸裂したんです。しゃがんだために助かったんですね。ほんとい瞬の差でしたよ。

「当美ちゃん、足がないよー」と牧志鶴子さんの叫び声が聞こえたんです。私はびっくりしましたが、入口から駆け込む人たちに壕の中に押されました。中は大変です。古波倉満子さんは手も足もだらんと垂れて、血まみれで死んでいました。石川節子さんはお魚を裂いたようにふくらはぎが裂けているし、知念芳さんは目をやられ、比嘉ヨシさんは胸を、神田幸子さんは足をやられ、皆わめいているんです。

荻堂ウタ子さんは腹をやられていました。

「もう私はだめよ。あの人たちから先に早く治療して」と言って、しばらくして息をひきとりました。

壕内は負傷者の呻き声、応急処置をする軍医、看護婦、学友たちの騒ぐ声でごったがえしです。まるで生き地獄でした。(注3)

軍の解散命令は皆がしーんとしてから先生が伝えました。信じられず、ぼーっとしていました。今までは先生も友達も一緒だし、それに軍も一緒ですから、まだ心強かったのです。解散といきなり言われ、力の抜けたこと。理由を聞く人もいません。皆ただ丸くしゃがみ込んで、声にこそ出しませんでしたが、涙をぼろぼろ流していました。

「これからは個別で、または小さなグループで行動し安全な場所を探して行きなさい」と言っていますが、いまさらすぐ出て行けと言われても、壕は敵に囲まれているのです。一刻を争う非常に危険な状態になっています。

結局、南の方以外に行くところはありませんでした。蜘蛛の子を散らすように壕を脱出し、みんな山城方向に向かって走りました。(注4)

解散後、敵中突破をし、6月22日、国吉でのことです。パーンという銃声で、はっと目が覚めたんです。ウウウーと唸る声に続いて、「何で私を殺さんか。私は皇国女

性だ。殺せ、殺せ」と叫んでいるのです。平安名貞子さんか大城貴美子さんか、どっちかわかりません。日本兵が撃とうとして逆にアメリカ兵に撃たれたのか、それともアメリカ兵が日本兵を見つけてすぐ射殺したのか分かりません。一緒に行動していた兵隊がアメリカ兵に殺されて、それで錯乱して、何で私も殺さんかと迫っているようです。

しかしアメリカ兵は撃とうとしなかったんです。それでもなお「殺せ」と叫んでいるんですよ。がたがたふるえながら宮城英子さんと2人は狭い岩陰で抱き合って、ジッと見ていました。発射音は2発しか聞いていません。静かになって草をかき分けて行ったら、その草むらから一斉に蠅がブーンと飛びだちました。ソテツの下で4人は枕を並べたように死んでいました。陽もかんかん照りつけていましたので、死体はもう膨れ上がっていました。平安名さんと大城さんは全然服装も乱れてなく、両手を腹の上に綺麗に組み、仰向けに寝たまま死んでいました。頭を打たれていました。

銃声は2回聞いただけですが、どんなにして4名が殺されたのか分かりません。まだ敵の真只中です。

ただ茫然として、涙も出ませんでした。(注5)

上原氏は最後に次のように語り、生徒一人一人と握手して講演を終わったのです。

「戦争は誰でもみさかえなしに殺します。戦争は冷酷で悲惨です。皆さんはどんな苦勞にも負けず強く生きていってください。命あつての幸せなんです。」

私はこの講演を聴き、胸が押し潰されるような気持ちになり、戦争へ駆り出されて行った多くの犠牲者の方々、特に若き学徒隊の方々に対し、哀悼の念を表したいと思いました。同時にこのように悲惨な戦争遂行責任者に対し、強い憤りを感じずにはおれません。

私は社会科の歴史教育を通じて、生徒諸君に戦争への反省と、犠牲者の霊に慰めを与え、平和の重要性を常々語っては来たつもりでしたが、今晚の上原当美子氏の講演には、どうこくの念に撃たれ言葉を失いました。

歴史を教える教員として考えるに、沖縄における皇民化教育の成果は絶大でありました。

沖縄の住民は本土住民と対等な扱いを受けるため、伝統ある琉球の言葉を放棄させられ、日本語を話すことが強要されました。学校の中では標準語を話さなければ「方言札」を首につけられるという罰則があり、言語差別教育が強行に実施されていました。

更に沖縄戦争が開始されると、戦争は本土攻撃を遅らせる為の「捨て石作戦」によって、一般住民をも犠牲にする悲惨な戦場と化し、本土を守るために沖縄は放棄されたのです。何よりも日本国家のため、天皇のために命を捨てることは当然のこととされ、敵に捕虜となることは恥とされ、最終的には死を選び、命を国に捧げるために玉砕することが美德とされ、崇高な愛国心であると教育されてきました。個人よりも国家・天皇のために命を投げ出すことが、日本国民としての義務であると教育され、真の皇民であるとされました。

特に本土より派遣された師範学校出身の教員は、「教育勅語」に基づく天皇崇拝を徹底的に教育することが教員の使命であるという理念の下に教育しましたから、教え子達は国家に忠誠を誓うことは何の矛盾も躊躇もなく、皇軍に協力し国體護持のために全力を尽くし、若き生命を国家・天皇に捧げて逝ったのです。(注6)

六月になると郭公が鳴き、梅雨の季節を迎え、北側の窓辺の側にある銀杏の木は、水分を十分に含み重厚な緑の葉陰を残す。

教壇で講義する歴史の授業は予定通り順調に進む。古代律令体制を終え、中世鎌倉政権から室町政権へと移り、いよいよ一学期の終焉を迎える。

七月は一期の期末試験、試験終了と共に、蒸し暑い夏の日が急に輝きを増すと夏期休暇。

## 秋 霖

約七週間の夏期休暇が終了すると元気な顔が戻ってくる。二年生も三年生も皆、夏期休暇を有意義に過ごし、各部合宿で鍛えられ、自信を持った逞しい顔つきに変貌している。

「諸君、夏休み中はどうしていた？何か変わったことはなかったか？」

「私は宿題のレポートのために北海道に行き、北方四島を間近に見てきました。」

「先生、私は夏休み中、野球部の練習ばかり、毎日が厳しく大変でした。」

「先生、俺は美術部に入っているんで、夏休み戸隠で合宿し、油絵を描いてきました。」

「俺は何もせず、ぐうたらテレビを見て寝てましたよ。でも二学期は頑張ります。」

「皆それぞれ収穫があり、充実して過ごせたのは良かった。さあ二学期も頑張ろう！！」

二学期が開始され、暫く立つと秋の長雨、秋霖を迎える。この頃になると残暑は姿を消し落ち着いた雰囲気の中で学習に力が入る。私は教壇に立ちながら一日一日の経過が実り多き時間に思え、一時間一時間が貴重な時間に思えた。授業をすることに充実感を感じ、生徒諸君に出来るだけ理解できるようにと、前の空き時間に板書をし、プリント史料を準備し講義内容を整備して授業に臨んだ。

日本史の授業は戦国時代から幕藩体制の成立に向かって進められた。特に対外関係の重要性を述べながら展開していった。205 教室から眺める校庭の風景は、一年で一番輝きを増す色鮮やかな秋を迎えた。生徒諸君は十月末の SPF（文化祭）に全力を挙げ、夜遅くまで仕上げに掛かった。SPF はあっという間に終わり、三年生は秋休み明けの 11 月 6 日、遂に論文提出日を迎えた。

「今日は三年生の卒論提出日、諸君も来年の今頃はきっと卒論を提出して満足感に浸っていると思います。そこで今日は「論文の書き方」と私が研究している「マリア・ルス号事件」について話してみたいと思います。

まず大切なことはテーマ（研究課題）を決めることで、どのような課題について論文を書くのか目標を明確にすることです。このテーマが決まるまでが大変、あれやこれや色々悩む事が多いと思います。テーマが決まれば論文を書く準備が始めて出来るのです。

次にテーマに関する本を読むこと。一番興味関心を持っていることについて書かれた本を始めから最後まで読み、著者が何に興味関心を払って書いているかを読み取ることです。次に前よりも専門的な本を読んでみる。この段階が済めば自分自身が何に興

味関心があり、何を研究していけばよいかははっきりしてきます。少なくとも四月までに決めておきませんと立派な論文は無理でしょう。ですから今日から本読みを開始し、冬休みは充分時間がありますから真剣にテーマに関する本を読むことです。

四月の始め選択授業の決定作業があります、それ以前に自分で関心を持ったテーマについて相談が出来るような先生を見つけ、その先生の選択授業を撰ぶことが大切です。選択授業の先生とよく相談し、その先生の指示に従うことです。論文の書き方は総ての先生が教えてくれます。しかし、自分自身で専門的な分野の論文を読む必要があります。その論文には論文の書き方が示され目次や註の書き方が解るでしょう。更に大切なことは論文の根拠となる根本史料を読み、史料の内容を理解することです。理解の方法の上に大切なことは必ず現地に出張し、現地をくまなく巡見をすることです。

次に私が研究している「マリア・ルス号事件」についてお話ししましょう。この「マリア・ルス号」の話に関しては教科書には書かれておりませんし、明治の始めの歴史を研究する方や人権問題について考察する方、又は船舶の海難事故を研究する方、はたまた裁判問題や外交関係を研究する方は知っているかもしれませんが、大学入試問題には先ず出てきませんし、興味関心ある方以外には余り知られておりません。そのためか始めて聞く方は興味を持って聞いてくれるのです。

私はル・ジャンドルというフランス生まれのアメリカ人の研究をしております。ル・ジャンドルは 1872 (明治 5) 年日本に來日し、明治政府に仕え、日本人と結婚して大きな功績を残された外交官です。しかしこのル・ジャンドルという方もほとんどの人は知りません。ただし、大久保利通や副島種臣、大江卓という方は多少は知っているでしょう。実はこれらの方々はマリア・ルス号事件と深く関係があり、明治政府が近代国家となる上には大切な働きをなした人々であったのです。彼等の果たした役割は近代国家日本の成立の上に重要な意味を持っていたのです。

1862 (文久 2) 年の生麦事件や翌年の薩英戦争、四カ国連合艦隊の下関襲撃事件等は、危うく日本は植民地化される寸前でした。しかも是を回避できた歴史の裏で活躍した、ル・ジャンドルの姿や、マリア・ルス号事件の国際的評価は非常に重要な意味を持っていたのです。教科書に記載してある表面の動きだけでは歴史の本質は解りません。

さて、1872 (明治 5) 年 7 月 9 日 (旧暦 6 月 4 日)、ペルー船籍のマリア・ルス号という帆船が横浜港に入港し、颶風でマストを破損し航行が不能となり、その修復作業をするために停泊許可を求めてきました。尚、当時ペルー国は日本政府と正式な国交関係はなく第三国扱いでした。そのためこのマリア・ルス号は通常の停泊地とは違い、港から遙かに離れた場所に停泊したのです。明治政府はマリア・ルス号の船長ヘレイラの要求を許可し、修理作業を見守っていましたが、数日後に木慶<sup>イビシ</sup>という清国出稼ぎ苦力が英国船艦アイアン・デューク号に救援を求めてきたことから、事件の本質が判明します。

即ちこのマリア・ルス号には清国出稼ぎ苦力 230 余名が乗船し、残虐な虐待を受けていることが判明します。そこで当時の外務卿副島種臣は米英の支持を受けたうえで、8 月 4 日マリア・ルス号の横浜出港を禁止し、神奈川県令大江卓 (25) に緊急調査を指令します。8 月 7 日に横浜県庁内に特別法廷を設置し、裁判長に大江卓を任命し裁判を開始

することを決定しました。

裁判は8月16～24日にかけて行われ、大江卓は230余名の清国出稼ぎ苦力を横浜臨時法廷に呼び出し一人一人尋問し、虐待の真実を調査した上で、帰船させず横浜に保護いたします。かなり強引な裁判手法でありましたが、国際法に照らしても横浜の港内で虐待が行われていた事と、奴隷売買の禁止は禁じられていることを理由に、8月30日船長ヘレイラに対し「有罪、正シ日本ノ刑法ニヨレハ杖百罪ニ相当スルカ情状ヲ酌量シ、刑ノ執行ハセズ」と判決を下し、ペルー側の敗訴及び清国出稼ぎ苦力の釈放を決裁しましたが、原告の船長ヘレイラはこの裁判に不服を申し立て、9月2日移民契約不履行の訴訟を起こし、出稼ぎ苦力の引き渡しを求めます。しかし、230余名の苦力はマリア・ルス号への帰船を拒み、船長ヘレイラの要求を否定し、明治政府の保護と中国大陸への帰国を望んだのです。

裁判長大江卓は船長ヘレイラの要求を受け入れ、ヘレイラの提出する移民契約約定書を吟味し、被告の再審を行い、9月27日裁判長大江卓は第二次裁判の判決は契約の無効と決断します。判決理由は「奴隷売買ハ不法テアルカラソノ請求ハ成立シナイ」というもので、船長ヘレイラは再上告を諦め、10月5日にマリア・ルス号を放棄し、一等航海士アイリスと清国の一少女を連れて上海へ退去します。この段階で横浜裁判は一応終止符を打つ事になりました。

翌年ペルー本国より特派全権公使としてアウレリア・ガルシヤ・イ・ガルシアが来日、マリア・ルス号裁判の判決の不法を論じ、日本政府に損害賠償を請求します。しかし、外務卿副島種臣は清国との正式な国交開始のためル・ジャンドルを伴って清国に差遣され、日本を後にしてしまい、ペルー国特派公使との十分な話し合いが出来ず、時間だけが経過したため、英・米両国公使の斡旋によって6月25日にロシア皇帝アレキサンドル二世に仲裁裁判を依頼し、ペルー・日本間に合意が成立しました。

この仲裁裁判とは国際紛争を、紛争当事国の選任した第三者の判定で解決することで、第三者の判断が拘束力を持つという裁判制度で、我が国始まって以来の国際的な裁判問題に発展し、その判決が注視されたのです。裁判は長期戦となり1874(明治7)年3月ロシア臨時代理公使花房義質を日本政府代表としてペテルスブルグに派遣し、公使館を設立します。更にロシア駐劄公使榎本武揚の努力もあり、1875(明治8)年5月17日からロシア外相代理ジョミニ男爵が主催して本件を審議して29日アレキサンドル二世は「日本政府ニハ賠償責任無シ」との判決を下します。

しかし、この判決の下される4ヶ月前に歴史的に大切な事件がありました。それは1863(文久3)年以来、英・仏両国は尊皇攘夷運動の激し時代でもあったため横浜居留居留地住民を保護する名目で、現横浜のフランス山の北東、港の見える丘公園の眼下に、陸・海軍の軍事基地を設定し、多くの軍隊の陸海軍ベースキャンプを設置していましたが、1875(明治8)年1月27日横浜駐屯部隊の引き上げを宣告します。即ち、英・仏駐屯部隊の引き上げは、明治政府の独立を承認するという意味を持っておりましたから、この軍事的駐屯部隊の引き上げは、世界的に明治政府の確立を認めたことを意味し、仲裁裁判を行うロシアに対して、間接的な影響はかなり強かったと思われるのです。

我が国初めての仲裁裁判に国際的な判決を受け、仲裁裁判に於いて勝利を納めました。是によって明治政府の国際的な基盤は安定し、名実ともに明治政府が承認され、独立国家としての歩みを開始することが出来るようになったのです。(註7)

今日はずいぶん長々と話しましたが、論文は余人に知られている事を研究するより、余り知られていないことを研究し、その研究の位置づけをはっきりすることが大切だと思います。」

桜の紅葉に始まり、躑躅、満天星、芝紅葉、平林寺から頂戴した四百年を超えるいろは紅葉が変色し、黄色の銀杏の葉が北風に乗って舞踊ダンスを始めると学年末。

図書館 205 教室での日本史の授業も幕藩体制の成立、朱印船貿易、鎖国令の確立へと進み、史料集を中心にした学習に熱が入り、二学期期末試験に突入していった。

試験が終わり、答案指導が行われ、少し時間が余った時

「諸君、少し時間があるから、教養として覚えておくと役立つ話を一つして置きます。

「SERENDIPITY」という言葉を知っていますか？字引を持っている諸君は引いてごらん下さい。そうです。「偶然の機会に放り出し物を発見する才能、掘り出し上手」と出ていますね。詳しくは 18 世紀後半にウォルポール (Horace Walpole) という英国の小説作家が作り出した造語で、「スリランカのお伽噺に出てくるセレンデップ国の三人の王子が、社会に出て三人が協力してある偶然の出来事から宝物を探す」と言う話から、「ある偶然のチャンスから価値あるものを発見する能力」と言われています。

私は此の「SERENDIPITY」現象の体験をしたことがあるので、その例をお話しましょう。二年程前の九州修学旅行の時でした。偶々長崎を訪れた際に起こったのです。

私は自主研修の時に県立長崎図書館を訪問、『明治七年臺灣蕃地事務支局來往翰』と言う古い記録を調べておりましたら、全く偶然にも当時の最高軍事責任者陸軍中将征蕃都督西郷従道が決定した次のような文章が飛び込んできたのです。

蕃地航海之爲日進艦孟春艦其他明光丸三國丸本日午十二時當塙開帆二付テ日進艦中檣二國旗ヲ掲ケ祝砲二十一發爲致施行之条爲御心得此段申遂候也 (註8)

私は丁度ル・ジャンドルの研究をしていた時ですから大変な感動を受けたのです。この文献は明治4年12月に「牡丹社事件」が起こり、多くの琉球・宮古島の島民が強い北西の季節風によって難破遭難し、台湾南部に漂着しました。しかし、そこに住む牡丹社族の現地人に50余名が殺害されますが、難を逃れた数名の島民が帰国し、この事件を政府に報告します。その結果、清国政府に損害賠償を迫りますが、台湾は化外の地(別の国)という回答を得て、政府は台湾出兵を計画します。その軍事的責任者は陸軍中将西郷従道でした。西郷は政府が中止命令を出したことは知っておりましたが、出兵の意欲を持った軍隊の熱意を考慮し明治7年5月2日に長崎から台湾に向けて、我が国初の海外出兵の決断がなされた瞬間を上記の史料は物語っているのです。

翌日になれば参議内務卿大久保利通が政府の中止命令を携えて長崎に入港することになっていました。到着1日前のせっぱ詰まった状況に断を下した歴史的な史料だっ

たのです。正に紙一重の出港だった訳で、NHKの『その時歴史は動いた』のその一瞬だったのです。翌日内務卿大久保利通は長崎に到着しますが、時已に遅し、出港した軍隊を引き還らせことは出来ず、急遽大久保、大隈、西郷が会談を行い政府の決定を覆し、台湾出兵の決定を認めざるを得ませんでした。その際ル・ジャンドルも長崎に居り、西郷の右腕となり色々軍事的な工作を練って、自らも台湾に出港するはずでしたが、大久保に止められ中止せざるを得なくなりました。尚、長崎の台湾蕃地事務支局の局長は参議大隈重信でしたから、明治初頭の政府の有力者が長崎に集まって我が国の将来を決定したことを物語っているのです。

私は丁度その頃台湾出兵と云う歴史的事件の史料を追求していた時でしたから、長崎県立図書館の史料との出会いは、正にSERENDIPITY現象が起こったような気がいたしました。(註9)

諸君、真剣に文献を探し求めていると、このような現象に出会うことがあるのです。卒論に向かって真剣に本を読んでください、徹底的に物事の真実を追究してみてください。史料の方がこちらに近づいて来ると云った事を経験すると、勉強することの真の楽しみが解ってくるでしょう。では冬休みを大切にしてください。」

立教新座高校の正門の前にある2本のヒマラヤスギに灯が点ると、チャペルからクリスマスキャロルが聞こえ、厳かなキャンドルサービスの降誕礼拝が来れば今年も終わる。

## 冬 晴 れ

冬休み明けの図書館205教室からは、北西の強風に冬空は澄み渡り、すっかり落葉したポプラ並木の間、紫紺に輝く秩父連峰の一角にある埼玉県の名峰武甲山が眺められる。再び図書館205教室に、生徒諸君が元気に戻ってきた。

「皆元気に有意義な冬休みを楽しんできたと思うが、変わったことはなかったか？私は、定年前の最後のご奉仕と思って毎年恒例の天元台スキー学校に行ってきました。初日は雲一つ無い快晴の天気、第3リフトの展望台からは、蔵王連峰、飯豊山、朝日連峰、鳥海、月山が見え、素晴らしいパノラマが広がっていました。スキーを指導する指導員の話では「こんな日の翌日は大荒れ、明日の天気が心配だ。」と言われました。その通り翌日から2日間は雨、春先のような天気、雪はどんどん溶けて少なくなり地肌が見えてきました。さらに天気は一転、4日目からは吹雪が激しく視界は不良。最終日の検定も最悪のコンディションでした。学校開設以来最悪でした。

処で、立教新座中高のスキー学校は今年で53回を迎えましたが、歴史を紐解けば54回が正解かもしれません。詳しくは『新座だより』NO54を参考。(註10)

今ではスキー学校は学校行事になっていますが、初期の頃は学友会主催で、学友会本部が中心になり生徒募集から宿舎、交通関係まで全部生徒の手で行っていたのです。生徒の意識の高さは今では比べものにならないくらい高いものでした。スキー学校の

開催地は今では天元台に固定していますが、当初の頃は池の平、志賀高原熊ノ湯、蔵王、万座等のスキー場を転々としていました。学友会本部の諸君は大変だったと思いますよ。2000年に中学校が出来てから中学生の参加者が多くて、高校生はほんの僅か、スキー学校全体が何となく寂しい。諸君来年は是非参加してみてもはどうだろうか？単に学校主催の行事運営に任せるのではなく、立教高校ジェントルマンの意地を見せ、学校とよく相談して高校生自身ももっとリーダーシップを発揮し積極的に行事に参加し、中学生を指導できるようになれば素晴らしいと思うけれど、.....」

暦の上で大寒を過ぎると入学シーズンを迎える。志願者の数が少なかった頃は本館だけで充分だったが、近年志願者の数が増え図書館棟の教室も使用される様になった。例年なら冬晴れの日が続き晴天で乾燥する日が続くのだが、今年は暖冬傾向のためか、冬晴れの素晴らしさは余り長続きしなかった。

そんな時、恒例の森林公園持久走大会が穏やかな快晴の2月13日(火)に実施された。

「マラソン大会について少々お話して置きましょう。2月13日に行われる森林公園持久走大会は今年で12回を迎え、内2回は雪のため中断されていますが、諸君にとっては大いに頑張るべき大会です。マラソンの苦手な諸君もいるでしょうが、スタートしたら最後まで頑張り抜くことは大なる意味があります。優勝するシナイは別にして、マラソンは自分自身との戦いなのです。苦しみに妥協すればそれで終り。最後まで頑張り抜けば満足感が与えられます。毎日少しずつ努力すれば、必ず大きな成果を生むことになるのです。立教ジェントルマンになるためには、この際大いに頑張るべきです。

私はマラソンを続けることに大きな自信を持っています。持久走による自信は身体を若く保ち、健全な健康維持にはもってこいのスポーツだと思っています。

実は私は、運動が好きだった性もあるかもしれませんが、中学・高校時代の体育の時間のマラソンは得意で、他人に負けるのがいやで走り続けました。そのためマラソンには自信があったのです。ところが教員になって数年後、生徒諸君と競争をしていくら頑張っても勝つことが出来ず、気は焦れども体が動かない、実に惨めな気分を味わい、普段大口を叩いていた私には辛い経験でした。高慢な私は生徒達に負けることによって始めて自分自身を見つめる事が出来たのです。

私はその時、教員である以上、生徒と共に一緒に頑張りたいと心に決めたのです。言葉でいくら頑張れと言っても、自分自身を鍛え、努力する姿を示さねば生徒はついて来ない。例え生徒諸君に勝てなくとも、生徒と共に同じ土俵で頑張ることに意味があると考えたのです。負けるのは年齢だから仕方ないと言って自己を納得させてはいけません。年齢は理由にならず、自分自身の練習不足を年齢にかこつけるだけで、みっともない姿だと思いました。それより生徒と共に己を鍛えない自分が恥ずかしいのです。

以来、少しずつ努力し、40年を経過しました。勿論時には休むこともありましたが、概ね走り続けてきました。走りながら思ったことは、努力をしない自分は惨めだ、生徒諸君と共に走り汗して互いに励まし合いながらゴールを目指す、そんな教員になりたいと考え、今日まで走り続けてきたのです。

更に立教高等学校にはマラソン大会に対しての長い歴史があるのです。

立教高等学校が創立したのは 1947(昭和 23)年 4 月 1 日の事で、池袋の立教中学校の校舎を借りて、教育基本法と学校教育法に基づいて新制高等学校として発足いたしました。この創立した年の 7 月 13 日に学友会活動の一環として、クラス対抗の駅伝大会が行われました。東京府中から甲州街道を一路新宿を経由して池袋の学校前を目指す。この間 14 の中継地を設け継ぎ継ぎに櫛を引き継ぐというもので、11 時スタートし 1 時間 58 分という記録が始まりでした。(註 11)

以来学友会主催の大会は毎年行われていたと思われませんが、学友会の新聞部が発行していた『立教新聞』第 26 号の記録によると 1951(昭和 26)年 12 月 5 日、池袋から練馬の区役所を往復する約 10 キロの距離を 1 人でマラソンをする大会が開催されています。90 名の参加で二年生の栗原栄君が 55 分 30 秒で優勝したと書かれています。更に『立教新聞』49 号には 1954(昭和 29)年 12 月 9 日、同コースで行われ三年生の金田君が 39 分 05 秒で優勝したとのことです。尚、1949(昭和 24)年から 1967(昭和 42)年に掛けて立教学院全体が一体となって立教学院運動会が行われマラソンも競技の一種として行われておりました。

本格的なマラソン大会が実施されたのは池袋から志木に移転した 1960(昭和 35)年以降のことで、はじめは駅伝大会の形式を踏んでおりました。開始は寄宿寮の駅伝大会がはじめて、立教の敷地の周辺約 3 km を 4 名の室員がバトンを引き継ぐ形式で行われておりましたのを学校の体育行事として 1967(昭和 42)年の柔道大会、1969(昭和 44)年にクラス対抗の駅伝大会を同一日(聖パウロ改心記念日)に行うことになり 1994(平成 6)年まで継続して行ってきたのです。更にこの大会をより本格的に行うようになったのが先ほど述べた「森林公園持久走大会」となり今回の第 12 回大会に成長してきたのです。之が立教に於けるマラソン大会の歴史というもので、体育の渡邊隆洋先生を中心に体育科の先生方や教職員の方々の陰の力を忘れてはなりません。」

さて、始めが在れば終わりが在るように、図書館 205 教室の日本史の授業も最後を迎えることになった。2 月 22 日(木)4 時限目、多少緊張しながら生徒諸君に立教のジェントルマンシップの最後の授業を次のように行ったのである。

「諸君、今日は私にとって、43 年間勤めてきた立教高校での教壇生活の最後の日、諸君には二度と日本史の授業を持つことは出来ません。諸君にとってもこの同じメンバーが今日のように全員揃って私の授業を聞くことは二度と再び来ないでしょう。今日の日が来ることは前々から解っておりましたが、実際今日になってみると感無量です。そこで、日本史の授業を離れ、43 年に亙る私の立教高校での教員生活について話してみたいと思います。

私は立教大学を終了すると共に、寄宿寮で全国より集まってきた寮生と共に寝食を共にする生活が始まりました。前村行雄、則武明之、森田利光、広瀬日出男、大貫金吾の各寮長の下に 15 年に亙る寄宿寮の生活は教育の根本が何に由来するかを身を以て体験できたのです。寄宿寮の基本はチャペルを中心にした全人教育の場で、立教の建学の精神を身を以て学ぶために、朝の礼拝に始まり終禱(コンプリン)に終わるというものでし

た。寄宿寮で生活し、チャペルで祈り、共同生活を送る内に洗礼を受ける生徒も現れたのです。

又、寮生は寄宿寮という規律ある共同生活で鍛えられ、親元を離れて自立心を養い、多くの友人を作り有意義な青春を謳歌したのです。ほら、あそこが寄宿寮です。

教員としての経験不足の私は寮生と共に過ごす 24 時間の生活で多くのことを学びました。教員としての資質を涵養され、責任と自覚を学び、今の私があるのです。更に寮生との信頼関係は親密な人間関係を生み、卒業後の今なお続いています。つい先日、三年生の選択授業の最後の時間に、今から四〇年も前に寮を去っていった寮生が 7 名も集まって多忙な時間を割いて授業を参観してくれたのです。嬉しかったです。教師冥利を感じました。正に教育の本質と実践を生徒諸君から教えてもらいました。そんな寮生活は私の宝物で、定年を迎える前に、毎時間この 205 教室から寄宿寮の姿を見て来ました。

教科を指導すると同時にクラブ活動の指導も大切な教育活動で、私は「応援団」、「フェンシング」、「アコライト」の部長を務めさせていただきました。中でも 1971 年 4 月庄司恒光先生よりフェンシング部を受け継ぎ、以来 35 年に亘る部の活動は充実してありました。春・夏の合宿をはじめ、各種の大会、遠征試合は多忙なスケジュールで休む暇もありませんでした。私の持論ですが、「フェンシングの基本は徹底的に走ることが大切で、基礎体力を付けなければ勝負に勝てない。故に技術よりも走ること。」を重視しました。それ故、生徒の先頭に立って走り続けたのです。関東大会、全国インターハイ、国体で、まずまずの成績を収めることが出来たのは各選手達が一緒に走ったからでした。更に、選手一人一人を信頼し、褒めてやることでした。試合の結果より、一つの試合に全力を出す事に集中させました。

フェンシング部の戦績については『立教高等学校学友会フェンシング部 創部 50 年史』を読んでいただければ一切が解ります。(註 12) フェンシング部の活動は素晴らしいフェンサー達と共に生活できたことで、教員生活を充実させてくれました。

私には立教で勤務する以上、立教学院に少しでも奉仕をしたいという気持ちがありました。立教学院が創立 110 周年行事に大郷博チャプレンを中心に運動部に所属しない素人のランナーが「日本列島縦断マラソンリレー」を計画し実行した際、少しでも協力しようと思い、最終ランナーとして新座の立教高校から学院までの約 20 キロを牛窪浩教授と共に並走することが出来たのは幸せでした。(註 13)

その後、創立 125 周年を迎える記念行事の一環として学院史を編纂する事になり、その編纂委員に任命され、『立教学院百二十五年史』が編纂発行されるまでの 10 年に亘る地味な作業に尽力しました。発行枚数の関係から総てを記載することが出来ず残念でしたが努力した甲斐があり、蒐集した多くの未発表の資料が『立教高等学校 50 年誌』の作成に役だったのです。(註 14)

更に学院主催の 125 周年記念行事「フィリピンボランティア植林キャンプ」に参加しました。フィリピンのヒブソン島での植林キャンプは各学校の教員をはじめ、中学生から大学院生までがこの行事に参加し、大変大きな成果を挙げたのです。夫れも海外で実施したのは立教学院創業以来の快挙でした。(註 15)

その後、この学院主催のキャンプは「八ヶ岳清掃ボランティア・キャンプ」となり、多くの参加者を集め只今継続中であります。

それにしても、これら立教学院主催のキャンプの目的は、常に建学の精神に基づく「祈りと奉仕」の精神に貫かれているからこそ、多くの参加者を集めうる根拠があるように思えるのです。

1960年に新座に移転した立教高等学校は、生徒の学力を向上させるために選択制度を採択し、年を重ねるに従い選択講座は充実して参りました。生徒の学習効果を更に発展させるため、選択講座は必修となり生徒諸君は興味のあるテーマを学習するようになったのです。多くの講座は試験で採点されていましたが、中にはレポートや論文を書かせる事で評価され、高校生が論文を書く作業も行われておりましたが、この論文作成作業が必修になったのは5年前の事で、生徒にとっては初めての経験で、原稿用紙30枚以上に論文を書く事は大変な作業となったのです。しかし、本当の学力を身に付ける上には有意義な意味を持っていると思います。

勿論指導する教員はこれ又頭を悩ませる課題でした。本を余り読まない生徒に学問的で本格的な論文を読ませて興味を持たせ、文章を書かない生徒に論文を書かせる作業は実に骨が折れましたが、生徒は期限が来れば結構やるものです。私はこの論文指導には先ず手本を示さねば成らないと思い、生徒と共に頑張ることにしました。生徒諸君と同じ図書館で席を並べ、深遠な歴史の世界を探求する学習は、教員最後の生活に実りを与えてくれました。

最後に、教員生活40余年を振り返った時、私はチャペルと共に在った様な気がしません。チャペルは私を厳しく訓練する場所でした。と同時に静かで心休まる場でした。主に祈り、自己の愚かさを常に教え導いてくれた場で、ステンドグラスから射し込む光線の美しさは忘れられません。

1941(昭和16)年幼児洗礼を受け、1952(昭和27)年に大久保直彦主教より堅信礼を受けて以来、立教高校時代から立教学院のチャペルを中心に、木曜日と主日の聖餐式を守り通すことが出来ました。チャペルでの半世紀を超える聖餐式は、立教学院の教育の根本(建学の精神)を生徒諸君に伝えるためのエネルギーの源泉であり、私自身を強くしてくれました。特に定年を迎える前の15年間、チャペルで毎週金曜日に1人静かに聖書を読み通した事は人生の意味を教えてくださいました。

今、こうして定年を無事迎える事が出来るのは、只々、総てを超えた主の導きに従ってきただけで、あらためて主に感謝を捧げたいと思うのです。

ところで諸君、君達は明日の立教を支えてゆく大切な人材なのです。諸君こそが立教の中心となり、立教ジェントルマンとしての誇りを忘れず、聖書に親しみ、驕り高ぶることなく、謙虚な気持ちを以て日々前進を続けてください。

立教学院で生まれ、立教学院を修了した暁には、明日の日本社会建設のために貢献できる人材になって欲しいと思います。それには健康な体力と、教養と学問を身につけ、他者を大切に生きる生き方を、実際に行動できる立教ジェントルマンになって欲しいと思

います。諸君に期待します。諸君なら絶対に出来る。立教で育っていった多くの先輩達がそうであったように、明日の日本社会を建設する素晴らしい人材となって人生を過ごして欲しいのです。いつの日にか、亦、諸君達とお会いする日を楽しみにしております。

今日は、最後の最後まで私の拙い話を聞いていただき、ありがとうございました。去年の四月以来一年間この図書館 205 教室を使用し、日本の歴史を共に考えて参りましたが、総てを語り尽くすことは出来ませんでした。しかし之を以て、私の日本史の授業を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。」

こうして、図書館 205 教室で演じられた 2006 年度の日本史の授業の緞帳は、静かに、静かに、降ろされたのです。

## 註 記

- 1 「西か東か、東か西か？」(『チャペルニュース』NO 476 号。)
- 2 『道を伝えて己を伝えず』立教大学チャプレン室 東京プレス 1999 年 3 月 P 5。
- 3 『ひめゆり平和記念資料館』ひめゆり平和記念資料館史料委員会。2004 年 8 月 P 96。
- 4 同上書 P 99。
- 5 同上書 P 120。
- 6 「修学旅行・沖縄コース」(『新座だより』NO57 立教新座中・高) 2006 年 7 月。
- 7 「マリア・ルス号事件」(『研究紀要』第 36 集 立教新座中学・高等学校) 2007 年 3 月。
- 8 『明治七年臺灣蕃地事務支局來往翰』蕃地都督府 P63。(長崎県立図書館蔵)
- 9 「SERENDIPITY 現象」(『新座だより』NO56 立教新座中・高) 2005 年 7 月。
- 10 「オー・シーハイル」(『新座だより』NO54 立教新座中・高) 2003 年 7 月。
- 11 『立教新聞』第 5 号 3 面。1948(昭和 23)年 9 月 7 日発行。
- 12 『立教高等学校学友会フェンシング部 創部 50 年史』丸文同印刷 2001 年 1 月刊。
- 13 「日本縦断 100 キロリレー」特集(『チャペルニュース』NO 332 号。)
- 14 『立教高等学校 50 年誌』発刊を祝して(『チャペルニュース』NO 477 号。)  
『立教高等学校 50 年誌』立教高等学校 絢文社 1999 年 12 月刊。
- 15 『フィリピンボランティアキャンプ報告書』編集長 古川加奈子 2001 年 12 月 7 日。

## 東風、南風、西風、北風、好文木

授業の最終時に図書館 205 教室での 1 年間の日本史に関する感想文を書いてもらった。生徒諸君の文章は、総てそのまま、一切手を加えていない。

A 君

「私立校のみの受験ということもあり、中学校三年間“社会”が苦手で大嫌いでした。

しかし高校二年の社会科目選択で、一からちゃんと勉強しようと思い、日本史をとりました。そこで、歴史の勉強というものの楽しさが解ってきた気がします。今まで（小・中学で）教わってきたことは、ほとんどが政治を動かすような貴族や将軍の名ばかり出てきて「歴史」というものと自分がかけ離れていると感じましたが、先生の授業、また、特にテストの論文問題などでは、下層階級である農民の政治への働きや行動を学ぶことが出来、「歴史」を身近に思えるようになりました。

また、“薫風”からはじまる「ジェントルマン精神」に必要な教養を身につけることが出来、立教学院の目標である「教養ある知識人」に一步近づけたと実感します。

来年度も日本史を希望しましたが、武次先生の授業でないことを本当に残念に思います。しかし、手を抜かずにしっかり勉強して、先生のような“ジェントルマン”を目指したいと思います。

一年間という非常に短い期間でしたが、知識だけでなく教養を授けて下さり本当に有り難うございました。そして、残りわずかな授業もよろしくお願いします。」

B君

「一年間日本史を教えて頂き有り難うございます。205 教室は四季の変化がよく解るとても良い教室でした。江戸川乱歩の話や薫風など、今まで知らなかったことを教えて頂いて有り難うございます。これからもお体に気を付けて元気な先生でいて下さい。」

C君

「先生の授業は日本史の用語を丸暗記させる授業ではなく、その歴史の裏に潜む背景を重視する内容でした。たとえば政治経済的な事件における農民の働きなどはとても興味深い内容で勉強になりました。今まで社会科といえば「暗記もの」という先入観がありましたが、先生の授業を受けて、歴史の繋がりがみたいなものを感じ、そういう繋がりを勉強していくことが重要だということ学びました。

そういう視点で日本史の授業を受けると、授業がよりよいものになりました。また、テストでは四〇点配点の論述問題があり、一学期は戸惑いもありましたが、だんだん慣れてきて、文章を書くコツを少しつかめた気がします。このテスト勉強で学んだことを卒論に生かしたいと思います。最後に先生が教えて下さった季節に関する言葉はとても美しい言葉だったと思います。例えば“薫風”は初夏を感じさせるいい言葉だなあと思いました。そういう言葉を学べたこともこの授業ならではのものだったと思います。」

D君

「先生は非常に印象的な方でした。社会の授業でジェントルマンの精神を聞いたことは忘れることが出来ません。またテスト方式にも他の先生方と違って論文を書かせるということで面倒臭くありましたが、歴史に必要なのは単語だけではなく文章だということがよく解りました。

先生が退職なさるということが残念でなりません。せめて後一年は私達の学年にいて欲しいと思うばかりです。

私も先生に習って一生の内に一つは論文を書き上げようかと思っています。未だ題名は決めていませんがライフワークになるようなこと、人に余り認識されていないようなこと

について書こうと思っています。今年一年間、本当に有り難うございました。」

E君

「僕は一年間を通して、社会の勉強もそうですが、どちらかといえば鈴木先生の話の聞きに教室に入っていたような感じでした。テストの点もろくに取れず、勉強は余りしなかったものの、高一の時からいわれてきた「ジェントルマンになれ」という言葉だけはずっと印象に残っており忘れることは出来ません。

今のほとんどの先生方は第一に勉強というのですが、鈴木先生の授業ではそんなことはなく、最初の授業の時に、「勉強なんて出来なくてもいい」といわれたのがとても嬉しかった。結局はしなければならぬのは解っていますが、「人生の勉強をしろ」といわれ、それはもっともだと思い、勉強より人生の勉強をこの授業では学びました。時々眠くなりましたが、先生の話はとても為になり、昔の授業の話の話を聞くと羨ましい限りでした。そして勉強も大切ですが人生について、人間についてももっともっと勉強し、先生の話の話を参考にして生きていこうと思っています。

卒論に関しても、とてもお世話になりました。一年間日本史を選択して良かったと思っています。

F君

「最初はジェントルマン、ジェントルマンと訳の分からぬ先生だと思った。難しい言葉も色々言っていたけれど、だんだんこの人は面白い先生だなと思い始めた。授業は何時も眠いけど、真面目に受ける時は面白いと思って受けていました。テストも頑張って資料を使って裏面にまで書けば、評価してくれた。又僕達の論文に関してもアドバイスしてくれてとても良い先生でした。僕としては武次先生には来年も残ってもらい、論文などのアドバイスを受けたいと思いました。一年間有り難うございました。」

G君

「高校から入学した僕は、図書館を余り利用したことがなかったので、始めて 205 教室に入った時は景色がきれいで驚きました。先生の授業は始めから黒板に板書してあり後は全部先生の話というスタイルに最初はとまどいましたが、つまらない教科書だけの授業よりも季節の言葉や教科書以外の歴史の話をして頂き楽しかったです。

「薫風」の話も面白かったのですが、「立教ジェントルマン」ということを教えて頂き本当に貴重な経験になりました。

マラソン大会には負けてしまいましたが、これからも心身共に成長していきたいと思っています。一年間どうも有り難うございました。お体に気をつけてください。」

H君

「薫風」という言葉を先生から教わったことが一番印象に残っています。先生は授業がはじまる前に僕達にその日にあった出来事や季節の言葉、歴史以外のことを色々教えてくださいました。

先生はこの教室が一番良い教室だと言っていました。確かにその通り。大きな窓か

ら見える景色は春夏秋冬関係なく全部の季節を綺麗に見ることが出来ました。色々な木の名前も教えてくれました。一年間ありがとうございました。マラソン大会お疲れ。」

I 君

「最初は日本史の事だけでなく、自分たちが知らない言葉を教えてくれて、普通の先生とは少し違うなと思いました。口先だけで話す先生はたくさんいるけれど、先生は実際にその場所に行って、色々調べたことを話しているので奥の深いところまで聞くことが出来ました。火曜日は一時間目なので黒板には書けないと言ってプリントを配布してくれたので解りやすかった。読めない字もあったけど、……。ずっと授業じゃなく、話を適当に入れてくれたので、退屈せず授業を受けることが出来ました。また授業を受けられたらなあと思います。」

J 君

「授業の始めの話が面白かった。教室は窓が大きいので景色が良い。どの季節も違った景色が見れて、その説明、その季節のことを話してくれたので良かった。」

K 君

「鈴木先生の授業は他のどの先生とも違う感じの授業でした。図書館棟の二階の季節の移り変わりがよく見える、静かな教室で受けた授業は、とても落ちついて、勉強には適していたと思いました。

ノートに写さなければいけない文字は多くて「こんなに書かなければいけないのか」と思いましたが、もともと字を書くのが好きなので余り苦にはなりませんでした。

又、先生はテストの点数が総てではないと教えてくれたので、伸び伸びと授業を受けられました。そのお陰でテストにも自然と力が入り良い点数が取れています。もし来年も先生の授業があったら絶対にとりたいと思います。」

L 君

「この一年間、鈴木先生に日本史の授業をして頂き、とても幸運だと思いました。先生は今年度で定年と言うことですが若々しく、授業にも活気があり、楽しい授業だったと思います。他の先生方だと歴史の内容を教えるだけですが、鈴木先生は歴史の裏事情や、時には歴史以外の豆知識なども話して頂き、とても印象に残りました。

マリア・ルス号事件や浜離宮の話など歴史よりも印象に残っています。マラソン大会でも、昨年私よりも速く走っていく先生を見ました。今年、退職されてしまうのが本当に残念です。これからもお元気で、そして、また立教に遊びに来てください。」

M 君

「この一年間日本史を学んで日本の歴史の深い部分までよく学べたと思う。僕は中学受験時にも日本史を学んでいて日本の歴史の大半は解っていた気になっていたが、実際そんなものは基礎中の基礎であった。どの時代にも聞いたことのない事件や法律の名、人物の名があり、自分は未だ全く日本の歴史を解っていなかったかが解った。」

また、知っている事件などでも、何故そのような事件に至ったのか、法律でも何故そのような法律を作る必然性があったかなど、自分の知識を更に深めることが出来たと思う。また、先生の授業の前後の雑談でも、自分の知識を増やすことが出来たと思います。最後に一年間有り難うございました。」

N君

「一年間先生の授業を受けて一番印象に感じたことは、教科書以外の話、季節の言葉から、先生自身のことまで、幅の広い話をしてもらったことだった。日本史の枠を取り払った幅広い話題は何時も興味深く勉強になったと思う。教科書やテストだけが授業じゃないと改めて感じる事が出来た。一年間有り難うございました。」

O君

「テストの出題形式には合っている授業形態だと思う。板書の仕方も、自分の言葉を用いたノート作りが出来るので良いと思う。口頭による説明の仕方には所々冗談も交え面白いと思う。先生の授業の形態は文を作る能力、正確に情報を聞き取り大事な部分を書き残す能力を向上させるのではないかと思う。

こうした授業形態は初めてのことであったので、最初は戸惑いましたが、そのうち慣れて、自分にはこうした授業があっているなあと思いました。授業にもよく集中でき、良い1年間を送れたと思っています。日本史の知識だけでなく、大人として学ぶべき事も積み上げてこられたことを感謝いたします。一年間有り難うございました。」

P君

「今まで一年間有り難うございました。歴史のこと以外でも『薫風』等のその季節に関した雑学のようなものを教えてくれたことが良かったです。日本史の授業で沢山の教養を身につけたと思っています。この授業を行った教室も遠いところだったけれど、一番季節を感じさせてくれました。春は桜、夏は青々した緑、秋は紅葉、冬は木々や芝は枯れているけれど澄んだ空気を感じる事が出来ました。

道を譲ったときに鈴木先生に『君はジェントルマンだね。』と言われた時は正直、嬉しかったです。こういう事がジェントルマンなのかと深く理解し、これからもそういった行為を日々意識し、行動に移していこうと思いました。ジェントルマン目指して頑張ろうと思います。」

私の日本史の授業に対する感想文を、総てそのまま採録しようと努力したのであるが、頁数の関係で取り上げなかった諸君に対しては大変申し訳ないと思う。

感想文を読み、最後の時であるにもかかわらず、私は未だ未だ教員として完成していない己の限界を感じた。私は生徒諸君に、深遠な日本の歴史を通じて、人間の本质をもっと多く語ってやりたかった。

しかし、今改めて己の43年の教員生活を振り返った時、私は常に生徒諸君と共に在った事を誇りに思っている。そして最後に、このような有意義な教員人生を送れた事に関し、常に主の導きがあったことを心から感謝したいと思うのである。 完